

ニホンヤモリが日本にやって来たのはこの1万年以内でした



自然・環境評価研究部 系統分類研究グループ

太田 英利

ニホンヤモリ (*Gekko japonicus*; 図左) は 19 世紀初めの日本産標本が元となり、文字通り「日本の家守 (やもり)」として記載されました。しかし古文書学的理由や現在の生息環境から、日本での在来性には疑問も残っていました。

そこで韓国や中国の研究者とともに分子生物的手法により、日本国内の各地の集団と、大陸中国や韓国の集団 (図左中) とを比べたところ、ミトコンドリア DNA の塩基配列を指標とした比較 (図右中) から、また核 DNA のマイクロサテライトに基づく解析 (図右) からも、それぞれの地域間で遺伝的分化がほとんどないこと、いっぽう中国の集団は遺伝的多様性が特に高く、日本の集団がその次で、韓国の集団では遺伝的多様性は限られることもわかりました。

さらに、更新世以降の日本や朝鮮半島各地での気候変動、なかでも気温変動の履歴を推定し、現在、ニホンヤモリが野外に分布している地理的な範囲から推定される、この動物の生息可能温度条件の下限の分布と併せて検討した結果、更新世末期のいわゆる最終氷期と呼ばれる時代の温度条件の下では、この動物の日本本土や周辺の島々でのこの動物の生存は、たとえば火山周辺の地熱のような特別な熱源がなければ不可能なことがわかりました。

以上をあわせるとニホンヤモリは、その名とは裏腹に日本古来の動物ではなく、過去 1 万年以内の沖積世と呼ばれる時代以降に日本に到達したことが示されました。移入の詳細な過程については、今後のさらなる研究が待たれます。

